

14. 第一次世界大戦と帝国の遺産

日時：2011年5月15日(日) 13時30分～16時30分

場所：日本大学文理学部3号館3405教室

趣旨説明：池田嘉郎（東京理科大学）

報告者：池田嘉郎（東京理科大学）、福田宏（北海道大学）、藤波伸嘉（東京大学）

コメンテーター：松沼美穂（群馬大学）

この研究会は、第4班の企画により、日本西洋史学会第61回大会の小シンポジウムⅡとして開かれた。ロシア・ハプスブルク・オスマンという3帝国が取り上げられ、それぞれ異なる歴史的前提と時間意識を持った諸帝国が、第一次世界大戦という共通の経験のなかで、どのような様相を示したかという点が比較検討された。

まず、池田が趣旨説明として第一次世界大戦の歴史的意義に言及し、総力戦が各帝国に「強制的同期化」や共振の作用をもたらした点を指摘した。総力戦の中で比重を増したネイションについても、それが帝国にとってかわったと考えるより、帝国間秩序の中で共振する一単位として捉えた方がよいのではないかという問題提起を行った。

池田は引き続き自らの報告を行い、コーポラティズム的性格を持ったロシア帝国が総力戦を経て「共和制の帝国」に変容したこと、多種多様な内実を持つ「民族」が、総力戦による政治参加の拡大により、統合単位としての重要性を増したことを指摘した。

福田報告は、ハプスブルク帝国では独立を求める勢力は少数派であり、多くの民族は帝国の存続を前提とした活動を行っていたこと、戦間期の国民国家間の対立を経て第二次世界大戦期に地域再編構想が再燃するが、冷戦の兆しが現れると共に消滅したことなど、ハプスブルク帝国をベースとした広域秩序に関する言説を論じた。

最後の藤波報告は、オスマン帝国の多民族多宗教統治が、法治国家化やムスリム・非ムスリムの平等化といった改革を経ながらも第一次世界大戦前後に崩壊し、広域的秩序が忘れられていく過程を、銀行家を軸としたギリシア正教徒共同体に光を当てながら論じた。

以上の3報告に対し、フランス帝国史の松沼よりコメントが寄せられた。本シンポジウムで検討されたヨーロッパ大陸の旧帝国と英仏などの近代的植民地帝国との間には大きな差異があるものの、共通点も挙げられる。例えば、第一次世界大戦期にフランスはアフリカ植民地より約60万の兵士を動員し、バルカン戦線などに派兵したが、現地社会の抵抗等によって寛容な統治システムを導入せざるを得なくなるなど、総力戦時の帝国に共通する共振作用が生じている。また、広域秩序の観点からは、第二次世界大戦後のフランスで植民地構成員にも「本国」と同等の資格ないし市民権を付与することが議論され、連邦制の導入が模索された点が紹介された。この時、ドゴールやフランス議会の議論においてはソ

連モデルも参照された。

質疑応答では、池田報告に関し、帝国刷新のための様々な構想が出されたとはいえ、中央アジア反乱をはじめとする、民族の実際の動静に触れるべきではないかとのコメントが出された。これに対しては、中央アジアの異族人の反乱は単なる帝国支配への抵抗ではなく、国民皆兵か軍役免除（異族人の身分特権）かという帝国のあり方をめぐるせめぎあいとして見なければならないと返答された。また、諸帝国のうちでロシア帝国だけがソ連という形で再生できたのはなぜかという問いに対して、基幹民族たるロシア人の国民国家化の遅れが指摘された。さらに、いつの時点までソ連社会をコーポラティヴとみなせるかについても議論がなされた。

藤波報告に関し、総力戦下の国民統合策についての質問に対しては、銃後の「国民経済」政策と前線の軍規維持とに注意が喚起された。また大戦後のギリシア・トルコ住民交換、帝国解体前後の王権の位置づけの変容の有無についての質問に対しては、バルカン戦争直後の複数国間での住民交換の文脈、そしてイスラームに則る平等主義的な政治文化の存在、更に青年トルコ革命後の「国民主権」原理の浸透を踏まえた大戦前後の連続性について補足的な議論が展開された。

福田報告に関し、第一次世界大戦がハプスブルク帝国に与えたインパクトについて質問が出されたのに対し、総力戦そのものが帝国を破壊したというよりも、ロシアの戦線離脱や連合国側の意向によって左右された部分が大きいとの回答がなされた。また、マサリクやチェコ軍団といった独立を求める勢力は少数であり、大戦末期に至るまで帝国を崩壊させるという議論は主流ではなかったとの指摘がなされた。中欧という言葉の用語法や広域概念を帝国の「遺産」と見なすことの是非についてもコメントが出された。

小シンポジウム「第一次世界大戦と帝国の遺産」趣旨説明

池田 嘉郎

※ 本稿は、2011年5月15日に日本大学で行なわれた、日本西洋史学会第61回大会小シンポジウムⅡの読み上げ原稿に、若干の手を加えたものである。

1. 「帝国の遺産」という視角

第一次世界大戦の100周年にあたる2014年が近づき、日本を含む各国では第一次大戦の歴史的意義を再検討しようとする気運が高まっている。単に100周年だからというのではなく、20世紀史全体をあらたな観点から理解し直すことが、可能でもあれば必要でもある時期にわれわれは来ているのであって、第一次大戦の見直しも、そうした作業のための重要な一環であると考えることができよう。

第一次大戦が現代史の起点をなすことについては、異論はないと思われる。だが、大戦で何が変わり、何が変わらなかったのか、また、地域による違いはどのようなものであったのか、そして、大戦によってはじまった一時代はどこで終わったといえるのか。これらの基本的な論点にはじまり、第一次大戦研究には、21世紀初頭という今日の視点から、あらためて考察を深めていくべき問題が数多く残されている。

本シンポジウムは、「帝国の遺産」という観点から、第一次大戦の歴史的な位置づけを考えることを狙いとしている。帝国という観点は、私と、報告者の福田宏氏が所属している新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」において鍵概念となっているもののであるのだが、本シンポジウムではこの科研には参加していない藤波伸嘉氏と松沼美穂氏に協力を仰ぐことで、議論をより深めることを目指している。

帝国に着目する意義はどこにあるのか。それは、何よりもまず、20世紀初頭の国際秩序の基本単位が、帝国であったという点にある。ここでは帝国をあまり詳細に定義することは避け、古い型の大陸帝国も、海洋植民地帝国も、ともに含む形で考えたい。当時の国際秩序が帝国からなる世界であった以上、帝国に着目し、その比較を行なうことは、第一次大戦の歴史的な文脈を理解する上で、有効であるといえる。

ついで、帝国のもつグローバルな性格にも、分析上の利点がある。帝国は広域にわたる国家であり、その政治は国境に厳密にしばられず、ときに越境する。この、帝国というグローバルな政体に着目することによって、一国史的＝国民国家的な歴史像を相対化することが可能になる。また、第一次大戦は、それ自身が「世界的な」出来事であるから、帝国に着目した大戦の研究は、二重の意味でグローバルな視点を提供できるということになるだろう。

さて、越境性によって特徴づけられるとはいうものの、各帝国は、それぞれが自律的な文明であり、独自の時間意識をもった世界であった。したがって、各帝国における大戦の経験は、それぞれの帝国がもっていた歴史的な前提と切り離すことができない。本シンポジウムの三報告で示される通り、「帝国の遺産」は、地域ごとに大きく異なる形をとって現れることになる。ロシア帝国では帝国は形を変えて復活するし、ハプスブルク帝国では広域秩序の可能性が残る。対照的にオスマン帝国では、旧帝国の広域秩序がほぼ完全に消滅してしまっただけで、かえって帝国の遺産があるといえるだろう。

だが、他方において、第一次大戦とは、そうした自律的な諸帝国が、地域ごとの背景の違いにもかかわらず、共通の時間と経験の中に巻き込まれて行く過程でもあった。本シンポジウムでは、①帝国ごとの大戦の経験の違いを明るみに出すとともに、②諸帝国に共通して、世界大戦がもっていた意義をも考えてみたいと思っている。

この二つの狙いのうち、帝国ごとの違いについては各報告で詳しく述べられることになる。この趣旨説明では、諸帝国に共通する経験という点について、今後の議論のために少し展開してみたい。

2. グローバルな共通経験としての第一次世界大戦：今後の議論のために

先ほど述べたように、帝国は自律的な世界であり、それぞれが独自の時空間の中に生きていた。そこに世界大戦という出来事が起こることによって、より近代的な帝国も、より古風な帝国も、共通の経験の中に巻き込まれていくことになる。それは、総力戦という同一の課題を遂行するということである。時空間の異なる諸帝国が、世界戦争という共通の場に引き込まれ、総力戦という同一の課題に直面する。これを私は仮に「強制的同期化」と呼んでおきたい。

諸帝国はそれぞれが異なる歴史的背景をもっているから、総力戦という課題への対応も、異なる様相を見せる。先行する戦争との関係でいえば、イギリス帝国の場合は、ボーア戦争の経験が大きな参照系となった [Mazower 2009]。これに対してオスマン帝国では、バルカン戦争との連続性が重要である (藤波報告)。帝国の構造という点から見ると、イギリス帝国は、自治領・植民地を最大限に活用することで、「帝国の総力戦」をもっとも成功裏に遂行することができた [木畑 2006]。同じ海洋植民地帝国のフランスにも、多かれ少なかれ同じことがあてはまる [松沼 2007]。対照的に地続きの大陸帝国では、総力戦は帝国の統合を大きく揺るがすことになった (池田報告、福田報告、藤波報告)。思想潮流に関しては、ドイツでは開戦以前からナショナリズムが急進化していたことが指摘されている [三宅 1995]。最近刊行された、第一次大戦期のヨーロッパ各国の人類学に関する論文集でも、国ごとの「人種」観の違いが大戦前にすでに見られたこと、大戦を経てその違いが増幅されたことが強調されている [Scheer et al. 2010]。

しかし、その一方において、これら異なる背景をもつ諸帝国、またその内部の諸地域の間に於いて、総力戦という同一の課題に直面するがゆえに、グローバルな共振作用が起こったということも、また事実である。異なる歴史的前提をもつ帝国間の共振という現象は、第一次大戦研究におけるもっとも興味深い側面の一つをなすといえる。たとえば、アイルランド、ならびにイギリス帝国の各自治領では、徴兵拒否運動の連鎖が起こった [Holland 1999]。フランスとドイツでは、社会の野蛮化の増幅が生じた [松沼 2010]。ドイツの戦争構想は、ハプスブルク帝国の諸民族を揺さぶった (福田報告)。ドイツで生まれた戦争社会主義のモデルは、ロシアに波及した [和田 1992]。最後に、日本帝国はグローバルな帝国主義秩序の周縁にいたがゆえに、かえってヨーロッパ戦争の世界化と総力戦化という趨勢をいち早く察知することができた [山室 2011]。

このグローバルな共振作用の中に、ネイション (国民) という単位を位置づけることも可能であろう。帝国への着目は、一国史的=国民国家的史観を相対化することにつながるものであるが、それはネイションという単位のもつ意義を無視することにはならない。実際、帝国とネイションの関係は、第一次大戦研究における基本的な問題点の一つであり、本日の三報告においてもそれは同様である。

第一次大戦中、各帝国においてネイションという単位は、社会統合の単位としての比重を急速に増していく (池田報告)。さきほど触れたように、戦争社会主義の理念は国境を越えて広がっていくが、その実現は常にネイションを単位として試みられた [木村 1995]。ネイションが比重を増すこと背景には総力戦があった。「ひとつしかない命」を捧げる帰属先として、住民自身が主権者たりうるネイションという概念が、力を発揮することとなったのである [松本 2008] (この過程と表裏一体の関係にあったのが、王朝的統合の挫折である [今野 2009])。大戦中、比較的統制色の少なかったイギリスでさえも、兵士墓地の様式の統一が、遺族の意志を無視して進められた [Gregory 2008: 255]。

しかしながら、ネイションが帝国にとってかわると単純に考えるよりは、先ほど述べた、帝国間の共振作用というグローバルな現象を構成する一単位として、ネイションを考えた方が、帝国とネイションの関係をうまく捉えることができるのではないだろうか。実際、帝国はそのグローバルな性格のゆえに、各地の植民地において、将来のネイション・エリートを育成することともなるのである [秋田 2005]。

以上のような、第一次大戦における様々な帝国のグローバルな共振という現象は、本日のシンポジウム、さらに今後の第一次大戦研究において、重要な論点となりうるであろう。

参考文献

[Gregory 2008] Adrian Gregory, *The Last Great War: British Society and the First World War*, Cambridge, Cambridge University Press

- [Holland 1999] Robert Holland, “The British Empire and the Great War, 1914-1918”, Judith M. Brown and Wm. Roger Louis (eds.), *The Oxford History of the British Empire. Vol.IV. The Twentieth Century*, Oxford, Oxford University Press
- [Johler et al. 2010] Reinhard Johler, Christian Marchetti, Monique Scheer (eds.), *Doing Anthropology in Wartime and War Zones: World War I and the Cultural Sciences in Europe*, Bielefeld, Transcript
- [Mazower 2009] Mark Mazower, *No Enchanted Palace. The End of Empire and the Ideological Origins of the United Nations*, Princeton, Princeton University Press
- [秋田 2005] 秋田茂「イギリス帝国史研究と地域史の対話」『歴史科学』第179・180号
- [木畑 2006] 木畑洋一「世界大戦と帝国の再編」『岩波講座アジア・太平洋戦争 8 20世紀の中のアジア・太平洋戦争』岩波書店
- [木村 1995] 木村靖二「ドイツ革命とオーストリア革命」歴史学研究会編『講座世界史 5 強者の論理——帝国主義の時代』東京大学出版会
- [今野 2009] 今野元『多民族国家プロイセンの夢——「青の国際派」とヨーロッパ秩序』名古屋大学出版会
- [松沼 2007] 松沼美穂『帝国とプロパガンダ——ヴィシー政権期フランスと植民地』山川出版社
- [松沼 2010] 松沼美穂「兵士たちはなぜ耐えたのか」『歴史評論』第728号
- [松本 2008] 松本彰「市民社会と国民国家、そして戦争——ドイツ近現代史における Bürger」『クァドランテ』第10号
- [三宅 1995] 三宅立「第一次世界大戦の構造と性格」歴史学研究会編『講座世界史 5 強者の論理——帝国主義の時代』東京大学出版会
- [山室 2011] 山室信一『複合戦争と総力戦の断層——日本にとっての第一次世界大戦』人文書院
- [和田 1992] 和田春樹『歴史としての社会主義』岩波新書

「共和制の帝国」の誕生：第一次世界大戦とロシア革命

池田 嘉郎

はじめに：報告の狙い

①帝政期からソ連期にいたる過程を、民族関係に焦点を当てて、連続性の中で捉えること。

cf. 権力論：[ブルダコフ 1997]。市民形成：[Sanborn 2003] [池田2007]

ネーションのもつ社団としての側面に着目：[中澤 2009]

②その過程において第一次世界大戦が果たした作用を明らかにすること。

③連続性を重視しつつ、20世紀論の成果をも取り入れること。とくに総力戦論 [和田 1992]

基本史料

Народы и области (『民族と地方』) 1914. 5-1914. 12 : 「ロシア諸民族団結協会」(1909創立) 機関誌。カデット左派オブニンスキーが主筆。領域的民族自治を支持。

Национальные проблемы (『民族問題』) 1915. 5-1915. 9 : 民族問題に関心をもつリベラル～社会主義者を糾合。文化的民族自治を支持。

1. ロシア帝国のコーポラティズム

- ❖ ロシア帝国：身分・領域・信仰・職業など様々な範疇の単位から編成（とくに国家ドゥーマ（下院）選挙規程）
- ❖ 国家ドゥーマ臨時召集（露暦1914. 7. 26）：諸民族代表がとくに発言
- ❖ 「民族」の内実は多様：①身分・歴史的特権（ex. 沿バルト・ドイツ人、ユダヤ人、グルジア人）、②社会経済的集団（ex. ラトヴィア人、リトアニア人）
- ❖ 開戦により、多様な内実を伴いつつ、「民族」が帝国の政治においてもつ意義が増す
代議員ゴドネフ「私はここではロシア人としてではなく…カザン県に暮らすタタール人、チュヴァシ人、チェレミス人に選ばれたものとして」発言 [『レーチ』 1914. 7. 27]
- ❖ その前段階
 - ・ 1905年革命期の自治・連邦論 [加納 2001]；下院民族フラクション [ツィウンチュク 1997]
 - ・ 「バルカンの諸事件と、とくにアルメニア問題とマケドニア問題」による自治・少数民族への関心 [『民族と地方』 №1. 1914. 5. 1]
 - ・ 第一次世界大戦：諸民族の擁護が正当化の根拠に（開戦過程は[Lieven 1983]）

2. ロシア人の地位：帝国の支配民族か？

- ❖ 「身分」「階級」で分断、国民国家化を経ていない。cf. 名望家層の不在 [石井 1991]
- ❖ 「ロシア人」「ロシア文化」はウクライナを含むのか？ [中井 1995][ミレル 2006]
- ❖ トルケスタン：ロシア人入植者と「異族人」[カザフ人などに適用された身分]の対峙；異族人の隔離入植論とアパルトヘイトの類似性 [西山2002]
 - ・ だが「畜産者に特化した異族人」、「植民者＝ロシア人」は、ロシア帝国のコーポラティヴな政治秩序における一単位でもある。
 - ・ 国家ドゥーマ選挙の「ロシア人」カテゴリーは辺境に特徴的（帝国支配と辺境における民族対立の先鋭化 [高橋 1990]）

3. 総力戦のデモクラシズム

- ❖ 大戦中、「民族」範疇の意義の増加←総力戦のデモクラチックな側面（①成員間の負担の均等化、②政治的権利の増加）
- ❖ 総力戦による日常の政治化（兵役・軍役、強制追放、動員）→現地住民の言葉・文化・宗教への配慮が重要に→ロシア中央部では「階級」、非ロシア人地域では「民族」が政治動員の重要な範疇に。

ロシア軍の隊列で35万人以上のユダヤ人戦士が戦っている以上、ユダヤ人の権利拡大請願を提起することが現在公正である。（ペトログラード市長イ・トルストイ、1914. 8. 10. 『民族と地方』№3-4-5. 1914. 9. 1）

- ❖ 同様に総力戦は、社会生活における経済対立を深めることで、「民族」の社会経済的な理解を（身分的な理解よりも）重要なものとする。

われわれのもっとも深刻な民族問題は、戦争のために、帝国の西部と南東部の国境地帯で発生することになった。破壊と死が現在支配しているそこでは、民族的敵意が根を張った。それは社会的な敵対関係によっていっそう鋭さを増した。ウクライナ人、ポーランド人、ユダヤ人の反目は、かなりの程度まで、社会経済的な前提状況に由来している。アルメニア人とクルド人、アルメニア人とタタール人 [アゼルバイジャン人] の敵対、アルメニア人に対するグルジア人の敵意にしても同じである。（経済学者エヌ・オガノフスキー「解放されたアルメニアの二つの問題」『民族と地方』№2. 1915. 7. 20）

cf. ドン・コサックについて [Holquist 2002]（ただし帝国のコーポラティズムへの関心は薄い）

- ❖ 総力戦・民族・民主主義の親和性（二月革命後には社会主義も）
 - ベラルーシ人民は（その知識階級と同様）、全体が住民中の勤労階級に属する。それゆえベラルーシ人民の民族的諸権利を擁護し強調することは、地域の勤労人民

の諸権利を擁護し強調することである。この場合、「ナーツィア」と「デモクラテ
ィア」の概念は完全に一致する。(ベラルーシ詩人エム・ボグダノヴィチ「ベラル
ーシ人」『民族問題』№2. 1915. 7. 20)

- ❖非ロシア人地域では、支配階級と被支配階級が通常異なる民族に属するので、「階級」概
念は「民族」概念に回収されやすい [青木 1977]
- ❖総力戦による政治参加の余地の拡大 (傷病兵・難民支援委、ラトヴィア人狙撃兵部隊、
ブリヤート衛生部隊) [Gatrell 1999] [Gatrell 2005]

4. 民族と帝国

- ❖「民族」範疇のもつ動員力の増大→民族エリートはロシア帝国というコーポラティヴな空
間を前提として、その一つの政治的単位として発言権の増加に努める。

[リトアニア社会の諸分野を概観して] 以上のことから、リトアニア人民がすでに、
みずからの地方的必要事をより自立的に管理できるまでに成熟したことは明らか
である。(のちのリトアニア首相ヴェ・ペトルリス「現代リトアニアに関する幾つ
かの事実データ」『民族と地方』№8. 1914. 12. 1)

- ❖民族の利害を実現するための場としての帝国

リトアニア諸社会団体による総司令官ニコライ大公宛て声明:[東プロイセンのリ
トアニア人地域にいる] われわれの国境の向こう側の血を分けた兄弟が、ゲルマ
ンの頸木から解放され、われわれと再統合されることをわれわれは信じている。
なぜならロシアの歴史的な使命は、諸民族の解放者たることなのだから。
(1914. 8. 22. 『民族と地方』№3-4-5. 1914. 9. 1)

グルジアの不倶戴天の敵、トルコ対ロシア宣戦は、民族の自然発生的な熱狂を
よりいっそう強いものとした。トルコ領グルジアの最後の州であるラジスタンの
再統合が予見される。そこには国境線からトラペゾンドにいたるまで、グルジア
民族のラズ＝メグレール種族が暮らしているのだ…これによりロシア帝国領内にお
ける歴史的グルジアの政治的統合は完了し、グルジアのムスリム化された諸州の
再ナショナル化のための好適な土壌が得られることになる。(グルジアの政治活動
家ゲ・ヴェシャペリ「グルジア」『民族問題』№2. 1915. 7. 20)

ユダヤ民族はみずからの文化的＝エスニック的特性を失わずして、国家の中で完
全な権利主体となりうるか。単一型の国家では…克服しかねる困難があろう。そ
れが実現可能であるのは、多くの民族、種族、人種を統合し、多くの宗教、言語、
文化を結びつける、偉大な「帝国」においてのみである。(ユダヤ人政治活動家ゲ・

ランダウ「ユダヤ民族と帝国」『民族問題』№1. 1915. 5. 20)

5. モデルとしてのイギリス帝国？

❖世界戦争によって帝国再編の可能性 (ex. ポーランド自治)。リベラル左派はイギリス帝国にモデルを見出す。

・ヘルシンキ大学教授コルフ男爵『大ブリテンの自治植民地』(1914. 2) : 「イギリスは植民地の自立性を自発的に承認した」 [コルフ 1914]

・カデット[立憲民主党、リベラル]左派オブニンスキーの高い評価：自治領による戦争支援は同書の結論を裏書 (『民族と地方』№3-4-5. 1914. 9. 1)

⇔青年トルコ党の中央集権化を批判 ([ボグチャルスキー 1914], 『民族と地方』№1. 1914. 5. 1)

❖だが、イギリス帝国の現状をロシア帝国の再編案として適用できるか

・イギリス本国と自治領は文化・経済面で相対的に同質

・帝国再編は主権の問題にかかわる

今日、地方(プロヴィンツィア)と主権国家の間には数十の階梯、段階がある [コルフ 1914]

❖カデット主流：主権の問題に敏感。左派と異なり、領域的民族自治に反対。例外はポーランドだが、ここでも自治構想は限定的。

「ポーランド王国の政体法案」に関するココシキン報告、カデット党協議会、1915. 6. 8：戦後のポーランド自治は「独自の行政と、地方議会が実行する立法をもつが、全国家的問題については全体に従う」。オーストリア帝国のガリツィアやクロアチア、それに第三次アイルランド自治法と同様 (⇔ハンガリー王国やフィンランド大公国のような同君連合ではない) [カデット党大会 2000]；第三次アイルランド自治法の限定的性格は[勝田 2010]

6. 二月革命

❖臨時政府 (カデット中心)：民族的・身分的差別の撤廃、男女同権、事実上の共和制

・総力戦体制に著しく適合 [和田 1983]

❖コア地域の国民国家化と、国民 - 準国民のヒエラルキーに基づく帝国秩序の整備という近代帝国の段階を一気に飛び越えたかのよう [山室 2003]

❖実際にはロシア帝国のコーポラティヴな構造は変わらず [池田 2007]

7. 自治のパレード

❖革命：権力の再定義と再分配。主権の所在はナロード (人民／国民／民族) に

- ❖ 臨時政府は「人民」代表の地位を独占しようとするが、ソヴィエト運動が対抗。さらに、総力戦の中で意義を強めた「民族」も主権の担い手として浮上。

革命を行なったのはロシアのナロードではなく、ロシアの諸ナロードである。彼らの民族感情は、小民族の解放を掲げた戦争によって覚醒させられたのだ(第8回カデット党大会、1917.5.11、キエフ州党委員会代表ブテンコ)。[カデット党大会2000]

ウクライナ総書記局がウクライナの機関ではなく単なる臨時政府の機関となることへの不満 ([ヴィンニチェンコ 1920])

- ❖ ペトログラード・ソヴィエトの講和方針「民族自決」。交戦諸国に大きな影響 [メリア 1983]
- ❖ 「民族自決」がロシア国内で意味するもの：諸民族エリートが民族自決理念に基づき「自治」を宣言、旧帝国の刷新を図る (cf. [小沢 1995] は「国民自決」と「一国民体一国家原理」の結びつきをよりリジッドに想定しているのではないか)
 - ・ 1917年の民族運動の概観は [ブルダコーフ 1989]
- ❖ 「文化的民族自治」と「領域的民族自治」：[山内 1986][尼川 2001]
 - ・ 原理的には対立せず [イスハーコフ 2004]
 - ・ 重要なことは、各民族の「自治」宣言が、旧ロシア帝国のコーポラティヴな政治空間を再強化する方向に働いたこと。さまざまな「ロシア民主連邦共和国」案。
 - ・ 同様に自治宣言は、コーポラティヴな政治単位としての「民族」の強化を目指す教育事業は人民の手に移らなければならない。すなわちナーツィアは法的権限をもつ集団として、一定の国家機能を担う機関とならねばならない。(アルメニア社会民主党、1917年7月。[ディマンシテイン 1930]402)

神学はヴォチャーク語でのみ教授される。(ヴォチャーク[ウドムルト]人知識人勢力大会決定、1917年6月。[ディマンシテイン 1930]420)

- ❖ 自治宣言はロシアからの離脱ではなく、ロシアの刷新のためのもの。コーポラティヴな政治秩序を維持するための民族自決
 - 若し、分離を云ふならば第一に分離したのは邊境地方にあらずして中央、即ち、莫斯科であつた。[スタンケーヴィチ1930]17
 - ・ cf. ペレストロイカ期の「主権のパレード」との類似性 [塩川 2007]

むすび：ポリシェヴィキによる「共和制の帝国」

- ❖ 自治共和国という発明：ポリシェヴィキ政権が、「自治」を掲げる民族エリート (の一部)

と提携して創出。バシキリア（1919. 3. 23）が最初 [Schafer 2001]

- ・諸民族に一律に共和制を適用：中央集権化、総力戦、国民国家という世界大戦の要請に対応
- ・他方で、コーポラティヴな単位としての「民族」範疇に、主権者としての地位を与えて国家制度化

（スターリン：共和国と自治共和国の実質的な差はない [Smith 1999]）

- ❖ 第一次大戦の果たした役割：帝政期のコーポラティヴな諸単位のうち、よりデモクラチックな性格をもつものが、総力戦と革命の中で近代政治の概念に読みかえられたのち、継承された。「農民」（身分・選挙単位）と「労働者」（選挙単位）は、「階級」に読みかえられた上で、ソヴィエト共和国の市民に。「民族」（身分・選挙単位）もまた、自治共和国の主権者に。共和制による帝国の再編という意味で、ソ連は「共和制の帝国」。
- ❖ 帝政期とソ連期：断絶でも単なる継続でもない。世界の一体化という時代にあつて（帝国主義）、20世紀的な要請に短期間で対応することを迫られた後進社会が（世界大戦）、あくまで現有の材料をもとにして自己変革。コーポラティヴな政治体制は継承。この、「古いものを残したままの現代化」というあり方自体が、特殊20世紀的。

参考文献

『民族と地方』 Народы и области

『民族問題』 Национальные проблемы

『レーチ [言葉]』 Речь (カデット党機関紙)

[ボグチャルスキー 1914]: В. Богучарский. Предисловие к русскому переводу. В кн. Э. Ф. Найт. Революционный переворот в Турции. СПб. (ロシア語版への序文. ナイト著『トルコの革命的転換』英語の原著1909)

[ブルダコフ 1989]: В. П. Булдаков. «Национально-освободительное движение народов России в 1917 г. и крах российской буржуазной государственности». Исторические записки. №117 (「1917年のロシア諸民族の民族解放運動とロシア・ブルジョア的國家統合の瓦解」『歴史紀要』)

[ブルダコフ 1997]: В. П. Булдаков. Красная смута: Природа и последствия революционного насилия. М. (『赤い動乱：革命的暴力の性質と結果』)

[ヴィンニチェンコ 1920]: В. Винниченко. Відродження нації. Ч.1. Київ (『民族の再生』)

[ディマンштейン 1930]: С. М. Диманштейн (ред.). Революция и национальный вопрос. Документы и материалы по истории национального вопроса в России и СССР в XX веке. Т.3. М. (『革命と民族問題——20世紀のロシアとソ連邦における民族問題の歴史に関する文書・資料』第3巻)

[イスハーコフ 2004]: С. М. Исхаков. Российские мусульмане и революция (весна 1917 г. – лето 1918 г.). 2-е изд., испр. и доп. М. (『ロシアのムスリムと革命 (1917年春–1918年夏)』第2版)

[コルフ 1914]: С. А. Корф. Автономные колонии Великобритании. СПб. (『大ブリテンの自治植民

地』)

[ミレル 2006]: Алексей Миллер. Империя Романовых и национализм. Эссе по методологии исторического исследования. М. (『ロマノフ帝国とナショナリズム——歴史研究の方法論をめぐるエッセイ』)

[カデット大会 2000]: Съезды и конференции конституционно-демократической партии. Т.3. Кн.1. М. (『立憲民主党大会・協議会』)

[ツイウンチュク 1997]: Р.А.Циунчук. «Имперское и национальное в думской модели российского парламентаризма». В кн. Б.Гаспаров и др. (ред.). Казань, Москва, Петербург. Российская империя взглядом из разных углов. М. («ロシア議会主義のドゥーマ・モデルにおける帝國的なもの、民族的なもの」、ガスパロフ他編『カザン、モスクワ、ペテルブルグ——多面的に見たロシア帝国』)

[Gatrell 1999]: Peter Gatrell, *A Whole Empire Walking: Refugees in Russia during World War I*, Bloomington, Indiana University Press

[Gatrell 2005]: Peter Gatrell, *Russia's First World War: A Social and Economic History*, Harlow, Pearson Longman

[Holquist 2002]: Peter Holquist, *Making War, Forging Revolution: Russia's Continuum of Crisis, 1914-1921*, Cambridge, Harvard University Press

[Lieven 1983]: D.C.B.Lieven, *Russia and the Origins of the First World War*, London, Macmillan

[Sanborn 2003]: Joshua A. Sanborn, *Drafting the Russian Nation: Military Conscription, Total War, and Mass Politics, 1905-1925*, DeKalb, Northern Illinois University Press

[Schafer 2001]: Daniel E. Schafer, "Local Politics and the Birth of the Republic of Bashkortostan, 1919-1920", in Ronald Grigor Suny and Terry Martin (eds.), *A State of Nations: Empire and Nation-Making in the Age of Lenin and Stalin*, Oxford, Oxford University Press

[Smith 1999]: Jeremy Smith, *The Bolsheviks and the National Question, 1917-23*, Basingstoke, Macmillan

[青木 1977]: 青木節也「民族革命」の運命——ウクライナにおける民族統一戦線の成立と解体1917 - 1920」、菊地昌典編『ロシア革命論——歴史の復権』田畑書店

[尼川 2001]: 尼川創二「ロシア革命とザカフカースの民族問題——「文化的民族自治」をめぐる論議と中心に」、『山口大学文学会誌』第51号

[池田 2007]: 池田嘉郎『革命ロシアの共和国とネーション』山川出版社

[石井 1991]: 石井規衛「ロシア＝ソ連史における政治文化の継続と革新」、近藤和彦・福井憲彦編『歴史の重さ——ヨーロッパの政治文化を考える』日本エディタースクール出版部

[小沢 1995]: 小沢弘明「国民自決の原理・連邦構想」、歴史学研究会編『講座世界史5 強者の論理——帝国主義の時代』東京大学出版会

[勝田 2010]: 勝田俊輔「アイルランド」、近藤和彦編『イギリス史研究入門』山川出版社

[加納 2001]: 加納格『ロシア帝国の民主化と国家統合——二十世紀初頭の改革と革命』御茶の水書房

[塩川 2007]: 塩川伸明『国家の構築と解体——多民族国家ソ連の興亡II』岩波書店

- [スタンケーヴィチ 1930]: 南満州鉄道株式会社庶務部調査課編『露西亞諸民族の研究』大阪毎日新聞社 (ロシア語の原著1921)
- [高橋 1990]: 高橋清治『民族の問題とペレストロイカ』平凡社
- [中井 1995]: 中井和夫「ウクライナ人とロシア人」、歴史学研究会編『講座世界史 5 強者の論理——帝国主義の時代』東京大学出版会
- [中澤 2009]: 中澤達哉『近代スロヴァキア国民形成思想史研究——『歴史なき民』の近代国民法人説』刀水書房
- [西山 2002]: 西山克典『ロシア革命と東方辺境地域——「帝国」秩序からの自立を求めて』北海道大学図書刊行会
- [メイヤ 1983]: A.J. メイヤ (齊藤孝・木畑洋一訳)『ウィルソン対レーニン——新外交の政治的起源 1917 - 1918年』(I・II) 岩波書店
- [山内 1986]: 山内昌之『スルタンガリエフの夢——イスラム世界とロシア革命』東京大学出版会
- [山室 2003]: 山室信一「「国民帝国」論の射程」、山本有造編『帝国の研究——原理・類型・関係』名古屋大学出版会
- [和田 1983]: 和田春樹「ロシア革命に関する考察」、『歴史学研究』第513号
- [和田 1992]: 和田春樹『歴史としての社会主義』岩波新書

ハプスブルク帝国末期の連邦再編論と民族自決

福田 宏

はじめに — 1848~1945年という時間幅で考える

- ◆ ハプスブルク帝国の遺産としての中欧？ (Mitteleuropa, střední Evropa, etc.)
- ◆ 危機の時代に登場、伸縮自在 ex. F. ナウマンによる「中欧」
- ◆ スロヴァキア人、ミラン・ホジャ (1878-1944) の中欧論をベースに考える

1. 帝国の「遺産」(第一次世界大戦前夜まで)

1.1 再構成される1848年革命の記憶 — 連邦再編に向けた最初の試み？

- O. ハレツキの定義 → ポーランドにおける400年の伝統？
- F. パラツキーによる構想 → ハプスブルク帝国という「大枠」の必要性を強調
- L. コシュートから O. ヤーシへ → ハンガリーのプランの「限界」

1.2 社会主義者による多元的連邦案

- 「小インター」としてのオーストリア社会民主党 → ブルノ綱領 (1899)
- カール・レンナーによる属地・属人原則の複合案『諸民族の自決権』(1918)
- オットー・バウアーによる社会主義的民族理論『民族問題と社会民主主義』(1907)

1.3 被支配諸民族(マイノリティ)による帝国再編論

- A. ポポヴィッチによる『大オーストリア合衆国』(1906) が典型？
属地原則に固執？ ドイツ人の区域が3つに分かれる

1.4 ベルヴェデーレ・サークルによる帝国再編論(中央集権的改革案)

- 皇位継承者フランツ・フェルディナント大公が主導 → 最大の敵はハンガリー
- オーストリア=ハンガリー二重主義の解消と非マジャール系諸民族との提携

2. 第一次世界大戦の衝撃

2.1 ドイツ帝国方面からの揺さぶり

- ナウマンの『中欧論』(1915) がベストセラーに (自由主義的帝国主義)
- ハンガリー：ハンガリーの自律性、経済領域の拡大、経済利益の有無
- チェコ：オーストリア・ドイツ人への対抗として「中欧」を支持する者も
- ポーランド：オーストロ・ポーランド的解決への期待、ロシアへの牽制

2.2 非ドイツ系諸民族による対抗案の提出

- T. G. マサリクの『新ヨーロッパ』(1918) が一つの形
ドイツとロシアの間における「小さな諸民族の地帯」

独立諸国家によって独・墺・洪に対する「障壁」を形成せよ

3. 戦後の国民国家成立と中欧の復活？

3.1 ヴェルサイユ体制下における新しい国民国家の誕生

各国間の火種、経済活動に対する負の影響、デモクラシーの実験

3.2 新しいタイプの地域再編論と従来型再編論の混交

小協商（チェコスロヴァキア、ルーマニア、ユーゴスラヴィア）

クーデンホーフ＝カレルギーの汎ヨーロッパ構想（1923）

ブリアン覚書（1930）→ 欧州27カ国による連邦形成

チェコスロヴァキア農業党を軸とするグリーン・インターナショナル

MAB（Mezinárodní agrární bureau）、4言語併記の機関誌（1923-38）

当初はスラヴの組織、20年代半ばより全ヨーロッパの組織へ

大恐慌 → ドイツの「生存圏Lebensraum」→ 中東欧の経済的依存

独がハンガリー、ユーゴスラヴィア、ルーマニアと通商協定（1934-35）

ホジャの対抗案 → 小協商とローマ・プロトコール（伊・洪・墺）の提携（1936）

4. 第二次世界大戦期における中欧再編構想

4.1 亡命政治家による構想（パリ、ロンドン、そしてアメリカ合衆国）

ヨーロッパ合衆国、フェノスカンディア合衆国、バルカン連合 etc.

チェコスロヴァキアとポーランドの国家連合構想：連邦か連合か

クーデンホーフ＝カレルギーのアメリカにおけるロビー活動

オットー・フォン・ハプスブルクのアメリカでの画策（オーストリアの復活？）

国際農民連合（International Peasant Union, London）

中東欧計画委員会（Central and Eastern European Planning Board, N.Y.）

カギを握っていたのはソ連 → 1941年6月独ソ戦勃発、42年夏頃より否定的姿勢

4.2 一事例としてのホジャの連邦構想

ベネシュとの政争に敗れ、アメリカへ → 「遺書」としての中欧連邦構想（1942）

4つのスラヴ諸国（ポーランド、チェコスロヴァキア、ブルガリア、ユーゴ）と

4つの非スラヴ諸国（オーストリア、ハンガリー、ルーマニア、ギリシア）

連邦大統領、連邦首相、各大臣ポストの設置、各国議会議員から成る連邦議会

民主主義の基軸として農民を想定

完全な自由経済ではなく、一定の計画制を取り入れた「混合経済」

おわりに

- ◆ 帝国そのものは解体されたが、「中欧的なるもの」という遺産が残った？
- ◆ 1989年以降における中欧論ブームと衰退？ — 危機が消滅したから？
- ◆ 欧州統合の前史として再検討 — 「西側の自由主義」の枠を超えて

主要参考文献一覧（邦語文献を多めに）

- 板橋拓己『中欧の模索：ドイツ・ナショナリズムの一系譜』創文社、2010年
- 遠藤乾編『ヨーロッパ統合史』名古屋大学出版会、2008年
- 遠藤乾、板橋拓己編『複数のヨーロッパ：欧州統合史のフロンティア』北海道大学出版会、2011年
- R. オーキー、山之内克子訳、秋山晋吾監訳『ハプスブルク君主国』NTT出版、2010年
- 篠原琢「地域概念の構築性：中央ヨーロッパ論の構造」家田修編『開かれた地域研究へ：中域圏と地球化』（講座スラブ・ユーラシア学1）講談社、2008年、pp.119-141.
- 田口晃、福田宏（解説・解題・抄訳）「カール・レンナー著『諸民族の自治権』1918年」『北大法学論集』（1）53巻2号、pp.207-260、（2）53巻3号、pp.131-167、2002年、（3・完）53巻5号、pp.285-317、2003年
- 辻河典子「ヤーシ・オスカルルの1920年代初頭における地域再編構想：『ドナウ文化同盟』（1921年）を手がかりに」『ヨーロッパ研究』8号、pp.63-82、2009年、など
- 戸澤英典「パン・ヨーロッパ運動の憲法体制構想」『阪大法学』53巻3/4号、pp.979-1013、2003年 など
- 中田瑞穂「議会制民主主義への突破と固定化：経路・課題・結果」『名古屋大学法政論集』（1）226号、pp.1-45、（2）228号、pp.157-207、2008年、（3）237号、pp.153-190、2010年、（4・完）238号、pp.147-207、2011年
- オットー・パウアー、丸山敬一他訳『民族問題と社会民主主義』御茶の水書房、2001年
- 羽場久泥子「ハプスブルク帝国の再編とスラブ民族問題：『東・中欧連邦化』構想とスラブ民族の『共存』の試み」『社会労働研究』32巻2号、pp.45-95、1986年 など
- 林忠行「戦略としての地域」家田編『開かれた地域研究へ』（既出）pp.91-118.
- 広瀬佳一『ヨーロッパ分断1943：大国の思惑、小国の構想』中公新書、1994年
- （福田宏『身体の国民化』北海道大学出版会、2006年）
- 福田宏「ミラン・ホジャの中欧連邦構想」（投稿準備中）
- A. ボロンスキ、羽場久泥子監訳『小独裁者たち：両大戦間期の東欧における民主主義体制の崩壊』法政大学出版局、1993年
- ジャック・ル・リデー、田口晃・板橋拓己訳『中欧論』文庫クセジュ、2004年
- カール・レンナー、太田仁樹訳『諸民族の自決権』御茶の水書房、2007年
- ジョセフ・ロスチャイルド、大津留厚監訳『大戦間期の東欧』刀水書房、1994年
- Peter Bugge, “The Use of the Middle: Mitteleuropa vs. Střední Evropa,” *European Review of History* 6:1 (1999), pp.15-34.

- Janez Cvirn, Jure Gašparič, “Friedrich Naumanns Konzept ‘Mitteleuropa’ und sein Echo in der Habsburgermonarchie,” In: J. Marušiak, et al (eds.), *Integračné a dezintegračné procesy v strednej Európe v 20. storočí* (Bratislava, 2008), pp.18-30.
- Milan Hodža, *Články, reči, štúdie* [論文・講演・研究] (Praha, 1930-34), 7 (6) vols.
- Milan Hodža, *Federation in Central Europe: Reflections and Reminiscences* (London: Jarrolds Publishers, 1942).
- George D. Jackson, Jr., *Comintern and Peasant in East Europe 1919-1930* (Columbia University Press, 1966).
- Miroslav Jeřábek, *Za silnou střední Evropu* [強力な欧州を求めて]: *Středoevropské hnutí mezi Budapeští, Vídní a Brnem v letech 1925-1939* (Praha, 2008).
- Robert A. Kann, *The Multinational Empire: Nationalism and National Reform in the Habsburg Monarchy, 1848-1918*, vol.2: *Empire Reform* (New York: Octagon, 1964).
- Dušan Kováč, “Milan Hodža: vom Belvederekreis zum Föderationsgedanken im Zweiten Weltkrieg,” In: Richard G. Plaschka, et al (eds.), *Mitteleuropa-konzeptionen in der Ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts* (Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1995), vol.1, pp.165-170.
- J. Kuklík, J. Němeček, *Hodža versus Beneš* [ホジャ vs. ベネシュ] *Milan Hodža a slovenská otázka v zahraničím odboji za druhé světové války* (Praha, 1999).
- Walter Lipgens (ed.), *Documents on the History of European Integration*, vol.2: *Plans for European Union in Great Britain and in Exile 1939-1945* (Berlin, 1986).
- Pavol Lukáč, *Milan Hodža v zápase o budúcnosť strednej Európy v rokoch 1939-1944* [中欧の将来をめぐる闘争におけるホジャ 1939-44年] (Bratislava, 2005).
- Vojtech Mastny, “The Historical Experience of Federalism in East Central Europe,” *East European Politics and Societies* 14:1 (1999), pp.64-96.
- Dagmar Moravcová, *Československo, Německo a evropská hnutí 1929-1932* [チェコスロヴァキア、ドイツ、欧州運動] (Praha, 2001).
- Miroslav Pekník (ed.), *Milan Hodža a integrácia strednej Európy* [ホジャと中欧の統合] (Bratislava: Veda, 2006). 2005～07年まで3回行われたホジャ・シンポ論集の一冊
- Christian Rühmkorf, “‘Volkswerdung durch Mythos und Geschichte’: Die deutsch-slavischen Beziehungen bei Friedrich Naumann und T. G. Masaryk,” *Bohemia* 41:2 (2000), pp.295-325. その他、本号には中欧関連の論考が4本収録
- Rudolf Schlesinger, *Federalism in Central and Eastern Europe* (London: Routledge, 1998). Reprint. First published in 1945.
- Helga Schultz, Angela Harre (eds.), *Bauerngesellschaften auf dem Weg in die Moderne: Agrarismus in Ostmitteleuropa 1880 bis 1960* (Harrassowitz, 2010).
- A. Štefánek, F. Votruba, F. Sed'a (eds.), *Milan Hodža: Publicista, politik, vedecký pracovník* [ミラン・ホジャ：ジャーナリスト、政治家、学者] (Praha, 1930).
- Peter M. R. Stirk, *A History of European Integration since 1914* (Continuum: London/ New York, 1996).

オスマン帝国、正教徒、第一次世界大戦

藤波 伸嘉

近代オスマン史と第一次世界大戦

国際秩序変動の画期としての大戦

「長い19世紀」から「短い20世紀」、「ヨーロッパの協調」から「民族自決」へ

先行研究

大戦史、大戦起源論：オスマン帝国は客体。「東方問題」の中の「瀕死の病人」

オスマン史：参戦過程や社会経済的変容。「トルコ」一国的な政府中心の視座

主要交戦国中のオスマンの特殊性

1911-23年の戦争の連鎖：大戦前より戦争中であり、大戦後の別の戦争で滅亡

広域的秩序解体の徹底性：ロシア、中国、欧州（西欧、中欧）などの例との異同？

分析視座：近代オスマン国制の再検討

近代オスマン国制を正教徒の視座から再検討

→「トルコ史」的観点の相対化。宗教横断的な広域的秩序とその解体過程に着目
バルカン戦争及びギリシア・トルコ戦争による質的断絶の側面

→近代オスマン史上の大戦の相対性。国際秩序変動過程の再検討、大戦の相対化？

近代オスマンの統治構造

前近代国制

イスラームに則り宗派区分に基づく属人的支配、オスマン王家を戴く家産官僚制

17世紀末-19世紀初：正教会の事実上の集権化、統治機構の一環たる聖職位階制

世界総主教座をめぐる非対称な国制認識：広域的な属人支配の「(創られた) 伝統」

→スルタン専制下の「隷属民 reaya」か、「特権」を持つ「ローマ人 Ρωμαίοι」か

ギリシア王国の成立（1821年ギリシア独立戦争勃発、1832年王国独立の国際的承認）

世界総主教座は旧来の世界教會的普遍主義 οἰκουμενισμός を保持

「二つの中心」：ローマ以来の普遍主義か、古典古代に範を取る民族主義か

ギリシア王国の領土回復民族主義「メガリ・イデア Μεγάλη Ιδέα」に対峙

ギリシア正教会の分離独立（世界総主教座は1850年になって初めて承認）

ローマ理念、ビザンツ史の再解釈：「宗教（＝正教）」を基軸とする「ギリシ

ア史」

オスマンの国制改革

国制近代化：タンズィマートTanzimat改革（1839年ギュルハネ勅令と1856年改革勅令）
領域的主権国家・法治国家化とムスリム・非ムスリムの平等。家産制原理の後退

1862年総主教座法 Rum Patrikligi Nizamati/ Εθνικοί Κανονισμοί

単一不可分の国民統合と並行して、宗派共同体の存在の国法上の再確認、再定義
広域的な属人支配という「(創られた) 伝統」の強化⇒「ミット制神話」の創造
共同体改革：銀行家・新ファナリオットΝεοφαναριώτες・高位聖職者の寡占支配

「ガラタの銀行家 Galata bankers」の時代

19世紀前半、広域経済秩序の再編

黒海交易：新港オデッサ建設とフランス海運撤退、ロシア穀物輸出発展
国際海運網：オデッサからリヴォルノ、マルセイユ、ロンドンへ
1840-60年代：資金貸付を通じたオスマン政官界への影響力増大

→正教徒商業網の結節点としての「ガラタの銀行家」

19世紀後半、国際経済秩序の転換

1850-80年代：西欧金融資本との競合、オスマン政官界への貸付制限
1870-1900年代：工業化の時代。オスマン領内での資本投下、産業発展

→オスマンの工業化の基軸としての「ガラタの銀行家」

近代オスマン秩序の完成

アブデュルハミト二世（1876-1909）とヨアキム三世（1878-84, 1901-12）の時代

スルタン＝カリフ及び世界総主教のボナパルティズム的支配

→地方名望家、官僚機構、軍、銀行家、神秘主義教団、同職組合などの支持調達

特にザリフィスΖαρίφης父子に代表される正教徒大銀行家を介して両者は直結

→前近代国制の遺制たる非対称な国制認識が、近代化された装いの下に再編制

ギリシア正教徒の本拠地オスマン：一大市場にして、正教会の抱く広域的秩序像の中心

近代オスマン秩序の解体：第一次世界大戦とその前後

世界総主教座の民族化・ギリシア化？

ブルガリア問題：匪賊と聖職者の協同、正教会の民族主義化・暴力化？

ギリシア王国との関係：「民族の中心」に対する独立性の漸次的低下？

1908年、青年トルコ革命

国政の立憲化に伴う民族間対立顕在化、共同体内部での銀行家支配の動揺
「国民」の単一不可分性強調。宗派別の属人支配や「国家の中の国家」への反発
トルコ人の共和主義的な国民国家志向、ギリシア人の共同体主義的な帝国志向？

1911-18年、戦争の連鎖

1911年、前史としての伊土戦争

1912-13年、バルカン戦争：「ローマの地 Rumeli」から「東方 Anadolu」へ

宗派主義的論理に基づくバルカン諸国の侵略、西欧列強の追認：「20世紀の十字軍」
オスマン世論の宗派主義化、「イスラーム世界」への関心と被害者意識の増大
正教徒商業網の分断：世界総主教座の管轄領域の縮小、マケドニア市場の喪失

1914-18年、第一次世界大戦

同盟には積極的、参戦には消極的：短期決戦の予想、戦後国際関係上の孤立回避
宗派主義的友敵関係の尖鋭化：総力戦下の国民動員、「人口工学」的発想の浸透
正教徒商業網の更なる分断
「国民経済 Milli İktisat」：経済機構の「オスマン化≒ムスリム・トルコ化」
英仏露埃との開戦：環地中海海運網の分断、西欧金融市場との途絶

1919-23年、ギリシア・トルコ戦争からローザンヌ条約へ

帝國的秩序の帰趨をめぐる戦い：オスマン、正教、ギリシア、トルコ、英仏露
トルコ：「解放戦争／独立戦争／民族闘争」建国神話。宗派主義的友敵関係固定
ギリシア：「破局 Καταστροφή」の記憶、「メガリ・イデア」の終焉
ローザンヌ条約と「民族自決」：「マイノリティ」の誕生、「ディアスポラ」の誕生
帝國的秩序の終焉：「トルコ」「ギリシア」の相互関係史という時空間認識へ

おわりに

一オスマンの滅亡のみならず、ローマ以来の広域的秩序の消滅過程として
宗教横断的統合、広域的秩序の選択肢をめぐる想像力自体の消滅
時空間認識における各国史的断絶確立：帝國的秩序の過去の積極的忘却

参考文献

- 秋葉淳2005.「近代帝国としてのオスマン帝国—近年の研究動向から」『歴史学研究』798: 22-30.
新井政美2001.『トルコ近現代史—イスラム国家から国民国家へ』みすず書房.
上野雅由樹2010.「ミット制研究とオスマン帝国下の非ムスリム共同体」『史学雑誌』119(11):

64-81.

佐原徹哉2003. 『近代バルカン都市社会史—多元主義空間における宗教とエスニシティ』 刀水書房.

杉原薫2003. 「近代国際経済秩序の形成と展開—帝国・帝国主義・構造的権力」 山本有造編『帝国の研究—原理・類型・関係』 名古屋大学出版会, 129-185.

鈴木董1993. 『イスラムの家からバベルの塔へ—オスマン帝国における諸民族の統合と共存』 社会科学の冒険16, リプロポート.

馬場優2006. 『オーストリア=ハンガリーとバルカン戦争—第一次世界大戦への道』 法政大学出版局.

深沢克己2007. 『商人と更紗—近世フランス=レヴァント貿易史研究』 東京大学出版会.

藤波伸嘉2009. 「国民主権と人民主義—トルコ『1921年憲法』審議過程における職能代表制論議」 『日本中東学会年報』 25(1): 55-82.

——— 2011. 『オスマン帝国と立憲政—青年トルコ革命における政治、宗教、共同体』 名古屋大学出版会.

Adanir, Fikret. 2009. “Beziehungen von Christen und Muslimen im Osmanischen Reich.” In *Christen und Muslime. Interethnische Koexistenz in südosteuropäischen Peripheriegebieten*, ed. Thede Kahl and Cay Lienau, 59-74. Wien: LIT.

Akarlı, Engin Deniz. 1976. “The Problem of External Pressures, Power Struggles, and Budgetary Deficits in Ottoman Politics under Abdulhamid II (1876-1909): Origins and Solutions.” Ph. D. diss., Princeton University.

Aksakal, Mustafa. 2008. *The Ottoman Road to War in 1914: The Ottoman Empire and the First World War*. Cambridge: Cambridge University Press.

Anagnostopoulou, Sia. 1998. Σία Αναγνωστοπούλου, *Μικρά Ασία, 19ος αι.—1919. Οι Ελληνορθόδοξες κοινότητες: Από το μιλλέτ των Ρωμιών στο Ελληνικό έθνος*. Αθήνα: Ελληνικά Γράμματα.

——— 2004. *The Passage from the Ottoman Empire to the Nation-States: A Long and Difficult Process, the Greek Case*. İstanbul: Isis.

——— 2010. «Το τέλος της αυτοκρατορικής λογικής, το τέλος της αυτοκρατορικής Κωνσταντινούπολης: η μεγάλη περιπέτεια». In *Μνήμη Πηνελόπης Στάθη: Μελέτες Ιστορίας και Φιλολογίας*, ed. Κώστας Λάμπας, Αντώνης Αναστασόπουλος and Ηλίας Κολοβός, 483-503. Ηράκλειο: Πανεπιστημιακές Εκδόσεις Κρήτης.

Augustinos, Gerasimos. 1992. *The Greeks in Asia Minor: Confession, Community, and Ethnicity in the Nineteenth Century*. Kent: Kent State University Press.

Chapman, Stanley. 1992. *Merchant Enterprise in Britain: From the Industrial Revolution to World War I*. Cambridge: Cambridge University Press.

Clay, Christopher. 2000. *Gold for the Sultan: Western Bankers and Ottoman Finance, 1856-1881: A Contribution to Ottoman and to International Financial History*. London: I.B. Tauris.

Cottrell, Philip L., ed. 2008. *East Meets West: Banking, Commerce and Investment in the Ottoman Empire*. Aldershot: Ashgate.

- Deringil, Selim 1998. *The Well-Protected Domains: Ideology and Legitimation of Power in the Ottoman Empire 1876–1909*. London: I.B. Tauris.
- Exertzoglou, Haris. 1989. Χάρης Εξερτζόγλου, *Προσαρμοστικότητα και ποτλική ομογενειακών κεφαλαίων. Έλληνες τραπεζίτες στην Κωνσταντινούπολη: το κατάστημα «Ζαρίφης-Ζαφειρόπουλος», 1871–1881*. Αθήνα: Ίδρυμα Έρευνας και Παιδείας της Εμπορικής Τράπεζας της Ελλάδας.
- 1996. *Εθνική ταυτότητα στην Κωνσταντινούπολη τον 19ο αιώνα: Ο Ελληνικός Φιλολογικός Σύλλογος Κωνσταντινούπολεως, 1861–1912*. Αθήνα: Νεφέλη.
- Faroghi, Suraiya and Gilles Veinstein, ed. 2008. *Merchants in the Ottoman Empire*. Louvain: Peeters.
- Fleming, K.E. 2000. “Athens, Constantinople, ‘Istanbul’: Urban Paradigms and Nineteenth-Century Greek National Identity.” *New Perspectives on Turkey* 22: 1–23.
- Georgeon, François. 2003. *Abdülhamid II: le sultan calife (1876–1909)*. Paris: Fayard.
- Giannuli, Dimitra. 1995. “Greeks or ‘Strangers at Home’: The Experiences of Ottoman Greek Refugees during their Exodus to Greece, 1922–1923.” *Journal of Modern Greek Studies* 13: 271–287.
- Gondicas, Dimitri and Charles Issawi, ed. 1999. *Ottoman Greeks in the Age of Nationalism: Politics, Economy, and Society in the Nineteenth Century*. Princeton: The Darwin Press.
- Hadziiossif, Christos. 1988. “Banques grecques et banques européennes au XIXe siècle: le point de vue d’Alexandrie.” In *Banquiers, usuriers et paysans: Réseaux de crédit et stratégies du capital en Grèce, 1780–1930*, ed. Georges B. Dertilis, 157–198. Paris: La Découverte.
- 1999a. “Issues of Management Control and Sovereignty in Transnational Banking in the Eastern Mediterranean before the First World War.” In *Modern Banking in the Balkans and West: European Capital in the Nineteenth and Twentieth Centuries*, ed. Kostas P. Kostis, 160–177. Aldershot: Ashgate.
- 1999b. Χρήστος Χατζιωσήφ, «Η μελ επόκ του κεφαλαίου». In *Ιστορία της Ελλάδας του 20ού αιώνα: Οι Απαρχές 1900–1922. Α’ τόμος, μέρος 1ο*, ed. Χρήστος Χατζιωσήφ, 309–349. Αθήνα: Βιβλιόραμα.
- Hanssen, Jens. 2011. “‘Malhamé–Malfamé’: Levantine Elites and Transimperial Networks on the Eve of the Young Turk Revolution.” *International Journal of Middle East Studies* 43(1): 25–48.
- Harlaftis, Gelina. 1996. *A History of Greek-Owned Shipping: The Making of an International Tramp Fleet, 1830 to the Present Day*. London: Routledge.
- Herlihy, Patricia. 1986. *Odessa: A History, 1794–1914*. Cambridge: Distributed by Harvard University Press for the Harvard Ukrainian Research Institute.
- Hirschon, Renée, ed. 2003. *Crossing the Aegean: An Appraisal of the 1923 Compulsory Population Exchange between Greece and Turkey*. New York: Berghahn Books.
- Hulkiender, Murat. 2003. *Bir Galata Bankerinin Portresi: George Zarifi (1806–1884)*. İstanbul: Osmanlı Bankası Arşiv ve Araştırma Merkezi.
- Kent, Marian, ed. 1984. *The Great Powers and the End of the Ottoman Empire*. London: George Allen & Unwin.
- Konortas, Paraskevas. 1998. Παρασκευάς Κονόρτας, *Οθωμανικές θεωρήσεις για το οικογενειακό πατριαρχείο: Βεράτια για τους προκαθήμενους της μεγάλης εκκλησίας (17ος – αρχές 20ού αιώνα)*. Αθήνα:

Αλεξάνδρεια.

Minoglou, Ioanna Pelepas. 2002. “Ethnic Minority Groups in International Banking: Greek Diaspora Bankers of Constantinople and Ottoman State Finances, c. 1840–81.” *Financial History Review* 9: 125–146.

Papathanassopoulos, Constantinos. 1988. “The State and the Greek Commercial Fleet During the Nineteenth Century.” In *Southeast European Maritime Commerce and Naval Policies from the Mid-Eighteenth Century to 1914*, ed. Apostolos E. Vacalopoulos et al., 177–187. Boulder: Social Science Monographs (distributed by Columbia University Press).

Philliou, Christine. 2011. *Biography of an Empire: Governing Ottomans in an Age of Revolution*. Berkeley: University of California Press.

Prévélakis, Georges. 2008. “Sécularité et modernité dans le monde orthodoxe post-ottoman: Une relation contradictoire?” In *Sécularisation et démocratisation dans les sociétés musulmanes*, ed. Semih Vaner, Daniel Heradstveit and Ali Kazancigil, 89–100. Frankfurt am Main: Peter Lang.

Quataert, Donald. 1997. “The Age of Reforms, 1812–1914.” In *An Economic and Social History of the Ottoman Empire: Volume Two, 1600–1914*, ed. Halil İnalcık with Donald Quataert, 759–943. Cambridge: Cambridge University Press.

Reynolds, Michael A. 2011. *Shattering Empires: The Clash and Collapse of the Ottoman and Russian Empires, 1908–1918*. Cambridge: Cambridge University Press.

Skopetea, Elli. 1988. Έλλη Σκοπετέα, *Το «Πρότυπο Βασίλειο» και η Μεγάλη Ιδέα: όψεις του εθνικού προβλήματος στην Ελλάδα (1830–1880)*. Αθήνα: Πολύτυπο.

——— 1999. «Οι Έλληνες και οι εχθροί τους: η κατάσταση του έθνους στις αρχές του 20ού αιώνα». In *Ιστορία της Ελλάδας του 20ού αιώνα: Οι Απαρχές 1900–1922. Α' τόμος, μέρος 2ο*, ed. Χρήστος Χατζηιωσήφ, 9–35. Αθήνα: Βιβλιόραμα.

Stamatoropoulos, Dimitrios. 2003. Δημήτριος Σταματοπούλος, *Μεταρρύθμιση και εκκοσμίκευση: προς μια ανασύνθεση της ιστορίας του Οικουμενικού Πατριαρχείου τον 19ο αιώνα*. Αθήνα: Αλεξάνδρεια.

——— 2009. *Το Βυζάντιο μετά το έθνος: Το πρόβλημα της συνέχειας στις βαλκανικές ιστοριογραφίες*. Αθήνα: Αλεξάνδρεια.

Şeni, Nora and Sophie Le Tarnec. 1997. *Les Camondo ou l'éclipse d'une fortune*. Arles: Actes Sud.

Toprak, Zafer. 1982. *Türkiye'de “Milli İktisat” (1908–1918)*. Ankara: Yurt Yayınları.

略年表

1821年 ギリシア独立戦争 (→1832年 ギリシア王国成立)

1839年 ギュルハネ勅令 Tanzimat Fermanı/Gülhane Hatt-ı Şerifi 発布

1856年 改革勅令 Islahat Fermanı 発布

1862年 総主教座法 Rum Patrikliği Nizamati/Εθνικοί Κανονισμοί 制定

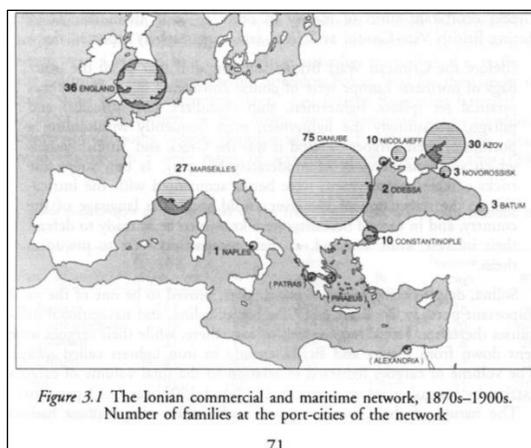
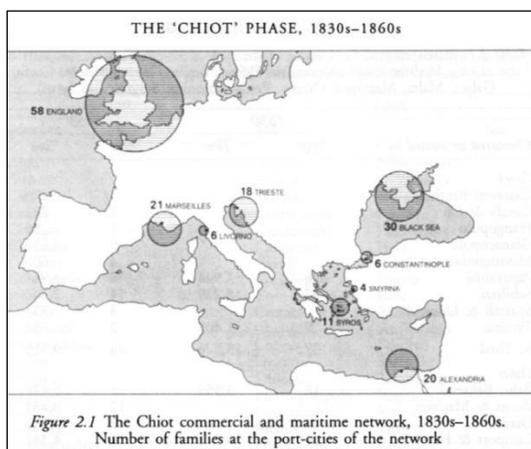
1856年 オスマン銀行設立 (→1863年、オスマン帝国銀行 Bank-ı Osmani-i Şahane に改組)

1870年 ブルガリア総主教代理座 Bulgar Eksarhhanesi 設置

1876年 オスマン帝国憲法 Kanun-ı Esasi 発布

- 1881年 債務管理局 Dette publique ottomane/Düyun-ı Umumiye 設立
- 1908年 青年トルコ革命 (第二次立憲政 İkinci Meşrutiyet、-18年)
- 1911年 伊土戦争 (-12年)
- 1912年 バルカン戦争 (第一次・第二次、-13年)
- 1914年 第一次世界大戦 (-18年)
- 1919年 ギリシア・トルコ戦争 (-22年)
- 1920年 トルコ大国民議会招集、セーヴル条約
- 1922年 オスマン帝国滅亡
- 1923年 ローザンヌ条約、トルコ共和国成立

正教徒海運網の発展 [Harlaftis 1996: 41, 71]



アブデュルハミト二世時代のオスマン帝国

[Georgon 2003: 482-483]

